

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K20751

研究課題名(和文) がん患者が「最期までその人らしく生きる」を支える日本型ACP看護支援モデルの構築

研究課題名(英文) Development of the ACP Model for Nurses to Support Cancer Patients to be True to Themselves and Live Their Lives until the Last Moment

研究代表者

竹之内 沙弥香 (Sayaka, Takenouchi)

京都大学・医学研究科・特定講師

研究者番号：00520016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外来化学療法を受ける進行肺がん患者を対象に、ACPの各プロセスにまつわる体験や思い、今後どのようなACPの支援を希望するかについて、混合研究法を用いて多角的に検討した。

調査によって得られたデータとその分析により、日本の文化的背景を配慮したがん患者への日本型ACP看護支援モデルを構築した。このモデルに基づき看護師が多種職との連携や地域や病院などの療養の場をつなぎ、ACPの各段階を支援できることにより、患者の人生の最終段階における医療に関する希望が尊重され、「最期までその人らしく生きる」ことに貢献できることが望まれる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine various experiences and thoughts concerning Advance Care Planning (ACP) in advance lung cancer patients who receive chemotherapy in the outpatient setting, and to explore adequate support for those patients through mixed method research.

Based on the data analysis and findings from our research, we have developed a Japanese-style ACP nursing support model for end stage cancer patients with consideration of Japanese cultural background. Nurses who learn and practice this model are expected to be successfully engaged in coordinating multi-professional team members in the various process of ACP. Those nurses, at the same time, will be able to collaborate with other care providers, such as case managers, MSWs, or home care team members, etc. at various care settings so that appropriate care accordant with patient wish will be provided and their QOL will be maintained.

研究分野：看護倫理

キーワード：看護倫理 アドバンス・ケア・プランニング 意思決定支援 エンド・オブ・ライフ・ケア 終末期看護

1. 研究開始当初の背景

日本人の2人に1人が「がん」になり、3人に1人が「がん」で死ぬ時代となった。中でも、2014年の肺がんによる死亡数は、すべてのがんで圧倒的最多の7万3396人であり、今後も日本人の肺がんによる死亡数は増加することが予測されている。近年のがん医療の進歩・発展は目覚ましいが、治療期を終えた進行がん患者の Quality of Life (以下、「QOL」とする。)が保たれた期間の延長に関しては、十分な研究成果が得られていない。

このような状況において、看護師には、アドバンス・ケア・プランニング(以下、「ACP」とする。)の支援を通して、患者の尊厳のある人生の最期を支えるという重要な役割が課されている。看護師が終末期がん患者のQOLを保ち、その人らしく生きられる期間を延長できるような看護を実践するためには、患者の価値観や希望を酌みとり、思いに寄り添う、日本の文化的背景を配慮したACP看護支援モデルの構築が必要不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、外来化学療法を受ける進行肺がん患者を対象に、ACPの各プロセスにまつわる体験や思い、今後どのようなACPの支援を希望するかについて、混合研究法を用いて多角的に検討する。

上記のことにより、日本の文化的背景を配慮したがん患者への日本型ACP看護支援モデルを構築する。この日本型ACP看護支援モデルは、看護師が多職種チームメンバーと協働しながら患者の思いを酌みとり、患者の療養の場である病院や地域へ患者の思いをつなぎ、適切にACPのプロセスを支援することにより、患者の人生の最終段階における医療に関する希望が尊重され、「最期までその人らしく生きる」ことに貢献できることを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究の趣旨を理解して、参加に同意した外来化学療法を受ける進行肺がん患者を対象に、ACPの各プロセスにまつわる体験や考えに関して量的研究により現状の把握を図ると同時に、ACPに関する過去の体験や現在の思い、今後の支援の希望について、質的研究により現象理解の深化を進めた。これらの分析結果を混合研究法を用いて多角的に検討することで、進行肺がん患者はACPにおいてどのような経験や思いを抱き、それらは日本文化にどのように影響を受けているの

か、さらに、「最期までその人らしく生きる」ことを支えるには、どのようなACPの在り方および看護支援が望まれるかを明らかにした。

2年間の研究期間のうち、初年度から次年度の前半を量的・質的研究によるデータ収集および分析、次年度の後半を分析結果のトライアングレーションと、日本型ACP看護支援モデルの構築に分けて実施した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究によって得られた質的データの分析および、研究者が調査対象者との面談を介して実施した質問紙調査において得られた量的データの分析を実施した。これらの分析結果のトライアングレーションにおいては、看護倫理やがん看護に携わる専門家のスーパーバイズを得ながら、進行肺がん患者がACPについて抱く思いと、それが社会的背景や文化的背景によって受ける影響について多角的に分析した。さらに、がん患者が「最期までその人らしく生きる」ことを支えるために、求められるACPのあり方や看護支援策を検討した。

本研究の量的調査の対象者のうち、有効回答者は60名で、平均年齢は66.6歳であった。回答者の45%は、医療に関する代理意思決定者の役割について、全く知らないと返答し、本調査に参加する以前に代理意思決定者を決定していた者は26%のみであった。しかし、本調査においてその役割と意義について説明をしたところ、回答者の8割以上は、治療の選択について自分で判断できなくなった場合に備えて代理意思決定者をあらかじめ決めておくことを重要と認識したばかりではなく、代理意思決定の委譲について家族や友人と話し合う自信があると回答した。このことから、進行がん患者は、ACPを支援することのできる看護師から代理意思決定者を選定する意義について説明を受け、その過程で適切な支援を受ければ、家族や友人と相談するなどして、代理意思決定者の選択および代理意思決定者への委譲ができる可能性が高まるであろうことが示唆された。

本研究の対象者が進行肺がんを患い、予後の好ましくない状況でありながらも、ACPへのレディネスや主体的参画の程度が他の先進諸国と比較して低かったことの要因には、対象者のACPに関する知識不足がベースラインに存在し、その上で辛い症状が出現するまでは「まだ大丈夫」「なるようにしか

ならない」と捉え、現段階での ACP の必要性を認識していないこと。また、主治医が ACP の話題を持ち出さない限り、医療者による ACP 支援を不要であると認識していることなどが、質的研究における患者の語りの分析からも導かれた。

特に、今後誰に ACP にまつわる相談をしたいかとの問いに対して、約 6 割の対象者は主治医と家族を選択し、看護師への相談を希望する者は全体の 7%のみであった。看護師への相談を積極的に望まない理由として、上述の通り、未だ ACP の相談が必要な時期でないにとらえており、「その時期が来れば」医師に相談した後、家族や自身で考えれば良いと考えていること、「看護師は忙しそう」であり、相談する相手として適任者ではないと感じていることなどが挙げられた。一方で、ACP に関する専門知識を持つ看護師であれば相談したいと思うかとの問いに対しては、47%の研究協力者から、話してみたいとの回答が得られた。この結果から、看護師が ACP 支援に携わる際には、事前に ACP に関する専門知識および技術を習得した上で、患者に ACP 支援の意義を説明できること。また、主治医および多職種チームと密に相談できる連携体制を事前に形作ること。さらに、これらの準備をした上で、看護師として ACP の過程で果たす役割を患者に理解してもらったうえで、ACP を支援するなど、信頼関係を礎として、対話から患者の思いを酌み、それを医療やケアに活かすことができるようにつなぐ関わりがができる体制を整えることの重要性が明らかになった。

本研究の結果をふまえて、看護師が患者に ACP の様々な段階において支援をする際の要点やコミュニケーションに関する実践的なアドバイスをはじめ、患者の価値観を尊重し、自分らしく生きることを支える意思決定支援策に関する日本型 ACP 看護支援モデルを検討した。

(2) 得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

本邦において、進行がん患者の ACP にまつわる体験や思いを明らかにした研究報告はこれまでに存在しない。本研究によって得られた調査結果に基づいて、日本の文化的背景を鑑みて、進行がん患者に ACP の支援をするにあたって配慮すべき点を説明する、日本型 ACP 看護支援モデルに関する資料は、ACP への参画にバリアを感じている看護師への参考資料として有用である可能性が高い。

また、今後本研究の成果を海外で出版されている学術誌において発表する予定である。患者を対象に実施された調査の結果から、ACP に携わる看護師のための支援モデルを構築された研究はこれまでに存在しない為、海外に在住する日本人および日本の文化と類似する文化的背景を持つ患者の看護を行う看護師が ACP 支援に携わる際に役立つであろう。さらに、諸外国で ACP の支援に携わる専門職が、日本以外の国に居住する、日本の文化的背景をもつ患者への ACP 支援策を検討・構築する上でも重要な資料となり得る。

(3) 今後の展望

今後、日本型 ACP 看護支援モデルを活用した教育研修プログラムの開発および、その効果の検証が求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Takeuchi, S. (2018) Empowering Nurses through End-of-Life Nursing Education in Asia: Nurses as Advocates for Patients' Dignity. *Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing*, 5(1), 9-11.

Malloy P, Takeuchi S, Kim HS, Lu Y, Ferrell B. (2017) Providing palliative care education: Showcasing efforts of asian nurses. *Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing* [Epub ahead of print] [cited 2017 Dec 26].

竹之内 沙弥香. (2017). 特集 その人らしい生き方を支援するために～アドバンス・ケア・プランニングの実践～ ACP をどう実践するか 在宅・病院・介護施設をつなぐ ACP のあり方. *がん看護*, 22(7), 683-686.

〔学会発表〕(計7件)

竹之内 沙弥香. ご本人と今後のことを話し合う～アドバンス・ケア・プランニング. 平成 29 年度第 14 回訪問看護研究会. 京都テルサ 大会議場. 平成 30 年 2 月 24 日

竹之内 沙弥香. インフォームド・コンセントを通じての患者の意思決定支援.

医療専門職による意思決定支援の質を高める。第3回患者・家族メンタル支援学会学術総会。ウインクあいち。平成29年10月29日

Takenouchi Sayaka. Improving the Quality of Life through Healthcare Delivery: Empowering Nursing Professionals to Provide Quality End-of-Life Care in Japan. Catholic Physicians' Guild of the Philippines 81st Annual Convention. San Beda College, Abbot Lopez Hall. Manila, Philippine. October 25, 2017.

竹之内 沙弥香、田村恵子、任和子。「外来化学療法を受ける進行がん患者のアドバンス・ケア・プランニングに関する意識調査」第22回日本緩和医療学会学術大会、パシフィコ横浜 会議センター413。平成29年6月23日

Takenouchi Sayaka. Autonomy and individual responsibility: Empowering patients through dialogue. Ethics Teachers' Training Course. Sri Lanka Foundation Institute. Colombo, Sri Lanka. February 23, 2017.

Takenouchi Sayaka. Empowering Nursing Professionals to Provide Quality End-of-Life Care in Japan. Aging Workshop. Verdon Smith Room, Royal Fort House. Bristole, United Kingdom. September 20, 2016

竹之内 沙弥香、宇都宮宏子、任和子。「看護師によるアドバンス・ケア・プランニングの現状と今後の課題: ACP 看護研究会地域公開講座における質問紙調査結果から」第21回日本緩和医療学会学術大会。京都国際会館。平成28年6月17日。

〔図書〕(計1件)

竹之内 沙弥香. (2017). 終末期医療における倫理的課題. A 生命倫理の理解. 経過別成人看護学 終末期看護: エンド・オブ・ライフ・ケア (1st ed., pp. z72-76) 東京都: 株式会社メヂカルフレンド社.

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹之内 沙弥香 (TAKENOUCHI, Sayaka)
京都大学・医学研究科・特定講師
研究者番号: 00520016

(2)研究分担者

御子柴 直子 (MIKOSHIBA, Naoko)
東京大学・医学(系)研究科(研究院)・助教
研究者番号: 50584421

(3)研究協力者

岡田 宏子 (OKADA, Hiroko)